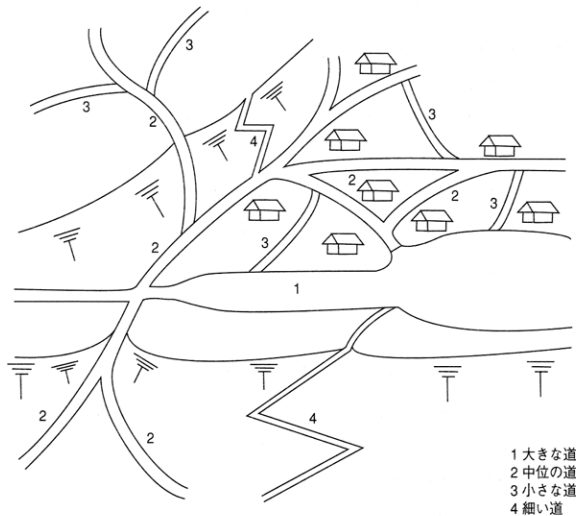


遺跡名	遺構名	長さ m	幅 m	傾斜角 °	備考
上野原	東道	120	0.8 ~ 2.4	4.8 ~ 5.1	前平式
	西道	72	1.2 ~ 3.4	2.7 ~ 5.6	
前原	東道	23	0.7 ~ 6.5	4.0 ~ 9.6	前平式
	西道	22	0.5 ~ 2.6	2.0 ~ 8.2	
永迫平	北道	17	2.6 ~ 5.2	8.5 ~ 11.1	前平式
	東道	51	1.4 ~ 8.2	4.6 ~ 7.6	
	西道	57	1.7 ~ 5.3	2.2 ~ 7.0	
上山路山	本道	64	0.9 ~ 2.5	6.6 ~ 17.5	岩本式
	支道	19	1.4 ~ 2.3	8.8 ~ 17.5	
加栗山	西道	62.7	1.6 ~ 2.4	1.9 ~ 5.7	前平式
水迫	東道	28	0.6 ~ 2.4	4.2 ~ 7.1	水迫式
	西道	15	0.9 ~ 4.2	不明	
二本木	西道 (推定)	43.6	2.4 ~ 5.7	1.6 ~ 3.4	塞ノ神式
加治屋園	西道 (推定)	13	0.8 ~ 1.2	1.5 ~ 3.5	旧石器
椿ノ原	南道 (推定)	53	0.4 ~ 2.8	5.0 ~	隆帯文

第1表 道跡 (検出及び推定) 計測表

※ 傾斜角の計測は、各報告書等掲載の挿図をもとに縮小した図を描き、分度器によって行ったもので、発掘調査現場での計測値ではない。



第9図 ミャンマーの4種類の道の概念図

が象徴的に教えてくれたのである。それがどういうことか、説明してみたい。

大きな道は、集落内を通る基幹道路である。番組では、巨石を据え付ける広場近くの、広場に至る集落の中心部を通る道である。傾斜の小さい、広い場所のほぼ中央を貫いているが、集落全体の位置から考えると、極めて短いものである。傾斜地であっても、傾斜に対して直交する方向に通っている。

中位の道は、集落内の住居間を縫うように走り、また、大小の道をつなぐようにめぐらされた道である。傾斜にそって、また、直交あるいは斜行するように縦横無尽に走って

いるようである。

小さな道と細い道は、共に傾斜の方向に沿って通るものである。前者が傾斜の割合に緩やかな場所に見られるのに対して、後者は傾斜のきつい場所に見られる。

もう一つの例は、国立民族学博物館刊行の雑誌『民族学』に掲載されていた2つの地域の写真によるものである。

1つ目の地域は、西北雲南地方のイ族(白イ)のナホー村の例である¹⁹⁾。焼畑農耕が行なわれている地域であり、低い山に囲まれた小盆地状の土地に集落が営まれているようであり、10軒程の家屋が散在しており、その間を縫うように1~2m程の道が巡っている様子が観察される。緩やかな傾斜の地形のところを、それこそ縦横無尽に道が走っている。ここには3mを越すような大きな道は確認できない。幅1mに満たない道もあるのであろうが、それは硬化した面の幅であり、その両外側も平坦であることから考えると、その空間的な広がりには1m以上となることは確実である。

もう一つの例は、ラオスの中部・北部に住むクム族の集落である²⁰⁾。山地の斜面に建てられた高床式の住居がひしめいており、その中を幅1~3m程と思われる道が縦横に走っている様子が見える。

これらの例は、集落の中での道の在り方を示しているように思われる。つまり、集落の中に入ると、当然のように人の往来が頻繁であり、その結果として道が形成されるという必然を生じると考えられるのである。住居と住居とを結ぶ道、また、住居と畑や集落外とにつながる